1980年代後半のラテンアメリカン・カルチュラル・スタディーズにおける文化理論の再構成

追手門学院大学　白石真生

1　研究の背景と目的

ラテンアメリカン・カルチュラル・スタディーズ（Estudios Culturales Latinamericanos 以下 ECL と略記）にとって、1980 年代後半はその学問的基礎が築かれた形成期であった。たんに ECL を主導する論者たちによる代表的著作が相次いで発表された時期（本報告で論じる論者たちに加え、R. オルティス、R. シュワルツ、B. サルロ、J. フランコら）というだけではない。ECL の主要な対象領域が切り出され、それらの文化領域を分析するために、ラテンアメリカ固有の問題意識から生み出されながらもそれを越えた射程をもつ概念が提起されたのがこの時期だからである。これらの概念は、ラテンアメリカ特有の文化状況を理解するためのものであるのと同時に、それまでの文化帝国主義的な見方を超克し、異なった文化空間がどのような関係を取り結んでいるのかという問題に正面から取り組むために要請されたものでもあった。それゆえ、それらの概念を考察することによって、ラテンアメリカの文化が ECL の理論においてどのように再構成されていったかということを透かし見ることもできるはずである。本報告は、この時期を代表する三つの著作を、こうした観点から比較検討することによって、1980 年代後半の ECL における文化の概念的組み換えを把握することをめざす。

2　方法

J.マルティン=バルベロの『メディアからメディエーションへ』(1987)、J. J. ブルナーの『くだけちった鏡』(1988)、N. ガルシア=カンクリーニの『ハイブリッド・カルチャー』(1989) の三つの著作を主に比較検討する。これら三つの著作を選択したのは、その著作において中枢的役割を果たす概念が明確に存在し、しかもそれがラテンアメリカ特有の文化状況を理論化するという機能を果たしているからである。

3　議論の内容と結論

これら三つの著作のそれぞれにおいて、文化の境界線を越え、文化の秩序を再定義するような概念が重要な役割を果たしている。マルティン=バルベロにおいては「メディエーション mediaciones」、ブルナーでは「文化的異種混交性 heterogeneidad cultural」、ガルシア=カンクリーニでは「ハイブリッド化 hibridación」がそれである。これらの概念は、異なった文化領域として区別されてきた、高級文化、民衆文化、民俗文化、大衆文化などがお互いの要素を流用したり、参照したりというかたちで交通をもち、混交し合っているという観点を共通して有している。また、懐古趣味的でロマンティックな文化観を鋭く批判する一方で、市場やマスメディアによる文化の商業化を、文化の自律性の浸食として悲観的に見るのではなく、いかに強力であっても文化を再編成する諸力のひとつとしてとらえようとする点でも一致している。そうした観点から見いだされてくる文化の在り様は、異なった出自をもつ諸力のコンフリクトによって生み出される多様な価値や基準が並存し、絶えず境界線を越えていこうとする動きによって新しい文化形態が創造され、過去の文化的ヒエラルキーが失効していく、いわば「ポスト自律的」文化とでも名づけられるようなものだ。

文献

Jesús Martín-Barbero, 1987, *De los medios a las mediaciones: Communicaciónn, cultura y hegemonía*, México: Gustavo Gili.

Jose Joaquin Brunner, 1988, *Un espejo trizado: Ensayos sobre cultura y políticas culturales*, Santiago: FLACSO

Néstor, García Canclini, [1989]2001, *Culturas híbridas: Strategias para entrar y salir de la modernidad, Nueva Edicion*, México: Editorial Grijalbo.